國學院大學学術情報リポジトリ

書評 金杉武司著『解釈主義の心の哲学：合理性の観点から』

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 塩野, 直之, Shiono, Naoyuki
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000083

〔書評〕

金杉武司著『解釈主義の心の哲学：合理性の観点から』

塩野直之

「そこに山があるからだ。」よく語られる逸話によると、エヴェレストの初登頂に挑んで頂上直下で消息を絶ったジョージ・マロリーは、なぜ山に登るのかという問いに答えてこう言ったという。

人間の考えることや行うことは、きわめて多岐にわたる。そのなかには、前人未踏の高峰に登る、宇宙生成の究極の原因を科学的に解明する、世界平和のために尽くすといった崇高な行為もあれば、朝起きて電車に乗って出勤する、夕食の献立を考えながらスーパーで買い物をする、恋人と他愛のない会話を楽しむといった、日常的な例も含まれる。さらに、家の鍵をかけたかどうか何度確かめても安心できない、禁煙を思い立ったにもかかわらず来る日も来る日も明日からにしようと先延ばしにするというような、ありがちとはいえ分別を欠き、容易に理解できない例もある。

金杉武司の著作『解釈主義の心の哲学』は、解釈主義というアプローチに即して、人間のこうした多様な営みを理解するための枠組みを構築しようとするものである。解釈主義とは、デイヴィドソンやデネットら、20世紀後半以降に活躍した英米の

哲学者の一部によって主導された考え方である。その特徴は、合理性を人間の理解の中枢に据える点にあり、その合理性には、欲求と信念から行為を導出する実践的推論、信念から他の信念を導出する演繹的ならびに帰納的推論、真なる信念を持つべきだという真理性の要請などが含まれる。解釈主義によれば、これらの一般的な合理性が人間に備わっていると前提すると、人のふるまいの観察を通じて、その人がたどった思考を明らかにし、行った行為を理解することができる。この理解のプロセスが「解釈」と呼ばれるものである。

他方、解釈主義は、心や脳に関する科学的研究から得られた知見とは、あまり関わりを持たない。このことは、最新の脳科学の成果を心の哲学に積極的に取り入れようとする、今日みられる顕著な傾向と好対照をなしている。その意味で、本書は近年の心の哲学の著作にしてはいささか稀な、純粋な哲学らしい哲学書だと言える。

このように本書は、いま流行している哲学の先端を紹介するというよりは、すでにある程度確立された考え方を深め、その完成度を高める点に価値がある。実際、デイヴィドソンやデネットの議論を踏まえつつ、そこで未解決となっていた多くの問題が緻密に検討され、きわめて水準の高い論考となっている。しかしこのことは、本書が単に先行研究に盲目的に追従したものにすぎないという意味ではない。例えば、デイヴィドソンの主要な形而上学的テーゼの一つである非法則的一元論に関しては、本書はそれを退け、解釈に実践的実在性という性格を付与している。また、翻訳と解釈の不確定性という、これまで多くの論争の的となった問題に関しては、クワインやデイヴィドソンの議論を超えて、合理性の文脈依存性という論点に基づくものとしてそれを理解している。これらの議論は、いずれも十分に独創性があり、詳細な検討を必要とするものであるが、残念ながらここで深く立ち入ることはできない。

さて、人間の思考や行為はきわめて多岐にわたるため、ある一つのアプローチがそれらのすべてを解明してくれるということは、とうてい望みえないことである。本書が解釈主義の立場を完成度の高い次元にまで導いたものであることを考えると、それを読むことを通じてわれわれは、解釈主義の射程と限界はどれだけのものかと問うことができるだろう。以下ではそのことを考察したい。

解釈による人間の理解が最も効果的なのは、人の日常的な営みで、そこに合理的な一貫性が認められるものである。ある男がスーパーに行き、牛肉、野菜、卵、豆腐を買ったとする。こ

れを観察する者は、この男はきっと、夕食にすき焼きを食べたいという欲求と、これらの食材を買えば夕食にすき焼きを食べることができるという信念を持っているのだ、とみなすことで、男の行った行為を理解できるようになる。それらの欲求と信念は、行為の合理的な理由となるのである。解釈とはこのように、さまざまな信念や欲求を人が持つと考えることによって、人の行為を合理的なものとして理解することである。

他方、人間はときに、不合理な思考や行為を行うことがある。解釈主義が合理性を中枢に据えるという点から予想できるとおり、このことは解釈主義が直面する重要な課題となる。とりわけ、意志の弱さと自己欺瞞という二つの現象は、不合理性の顕著な例としてよく論じられ、本書においてもこれらが最終章で検討される。ここではその前者をやや立ち入って紹介しよう。

意志の弱い行為とは、ある行為を行うのが最もよいと判断したにもかかわらず、人がそれに反する行為をしてしまうことである。例えば、煙草を吸うべきではないと判断した男が、目の前の煙草を吸ってしまう。解釈主義は、このような行為を理解する有効な手だてを与えてくれるであろうか。

本書によると、どの行為を行うのが最もよいかを人が判断するとき、それは二つの視点からなされうる。一方は、自分の人生におけるさまざまなものごとの望ましさを、俯瞰的に考慮に入れる視点である。煙草を吸うべきでないという判断は、この視点から下される。他方は、時空間的に近接したものごとに強く注意が向けられ、考慮においてそれらに大きな重みづけがなされる視点である。この視点からは、煙草を吸うべきだという判断が下される。すると、意志の弱さとは、このように二つの視点から下される判断が食い違い、後者に即した行為が行われる場合として捉えなおされる。

しかし、意志の弱さについての上の説明を受け入れると、そのような事例ではもはや、判断を下す一人の主体というものが分裂し、それぞれの視点に応じた二人の主体が存在するとみなさねばなくなるのではないだろうか。つまり、意志の弱さは、解釈の自明の前提をなすと思われる、思考し行為する一人の主体という考えを脅かす深刻な問題なのである。ここで詳述はできないが、同様の問題は自己欺瞞に関しても生じる。そして本書は、あくまでも合理性の観点に依拠しつつ、それら不合理性の事例においてもやはり、思考し行為する一人の主体の存在を認めることができるという議論を展開して締めくくられる。

これを日常的な経験に照らしてふり返ると、われわれは、自

らが不合理な思考や行為に陥ったとき、心の内にしばしば葛藤を感じるものである。そして心の葛藤とは、あえて稚拙な言い方をすれば、自分のなかに二人ないしそれ以上の自分がいて、それらのあいだに争いが生じているのだが、しかしそのいずれもが自分であるには相違ないという感覚である。本書による意志の弱さや自己欺瞞の分析は、この日常的な感覚を、解釈主義の精緻な道具立てを用いて述べなおそうとするものである。それゆえ不合理性は、一見したところ困難な課題を突きつけるものでありながら、それを巧みに解決することができるならば、解釈主義の射程の長さをむしろ逆に示しうるものだと言うことができる。

最後に、冒頭のマロリーの逸話に戻ろう。すでに述べたとおり、解釈主義が強調する合理性の一つは、欲求と信念から行為を導出する実践的推論の合理性である。例えば、エヴェレストに登りたいと欲しており、エヴェレストに登るためには酸素ボンベを山に運ぶ必要があると信じているならば、酸素ボンベを山に運ぶべきである。この実践的推論を彼が行ったとみなすことによって、われわれは、「マロリーはなぜ酸素ボンベを山に運んだのか」という問いに答えることができる。ここまでは、解釈主義の説明がその効力を発揮する範囲内である。

だが、マロリーはそもそもなぜ、エヴェレストに登りたいと思ったのか。この問いに迫ろうとしても、解釈主義は答えを与えてくれない。「そこに山があるからだ」という言葉は、エヴェレストに登るという行為を導出するような、何らかの実践的推論の構成要素となる欲求や信念を指し示すものとは考えにくく、したがってそれは、解釈主義の言う意味で、その行為の理由を明らかにしてくれるものではない。むしろ彼にとって、エヴェレストに登ることはそれ自体、まさに命を賭けるに値する最終的な目的だったことだろう。

もしかすると、人の持つこのような最終的な目的に関して、なぜそれをするのかと問うことは、意味をなさないことなのかもしれない。そしてマロリーの言葉は、「理由などない」ということを洒落た言い方で表現したものにすぎなかったのかもしれない。さらには、こうした問いがどのみち答えのない問いであることを示し、それに答えようとしなくても行為の理解は十分にできることを明らかにしてくれる点も、解釈主義の有意義な帰結の一つだと主張することもできるだろう。

しかし本当に、話はそれに尽きるのだろうか。前人未踏の高峰に登るという行為を、人はいったいなぜ成し遂げたいと思うのか。これはやはり、われわれが人間というものに関して理解

したいことがらの一つではないだろうか。そしてわれわれのなかには、「そこに山があるからだ」という言葉を通じて、マロリーの志に共感を抱き、彼の行為をより深く理解できると感じる者もいるのではないだろうか。人間の多様な営みには、このように不可思議で、「なぜ」と問わずにいられないものが無数にある。そして、その問いへの答え方もまた、多様であってよいように思われる。こうしたことを考えると、解釈主義のアプローチは、当然のこととはいえ、われわれが人間の営みについて理解したいことすべてを余すところなく解明してくれるものではなく、自ずとその限界を持つものであることが見えてくる。

（A5判、二五四頁、勁草書房、二〇一四年四月発行、定価四二〇〇円＋税）